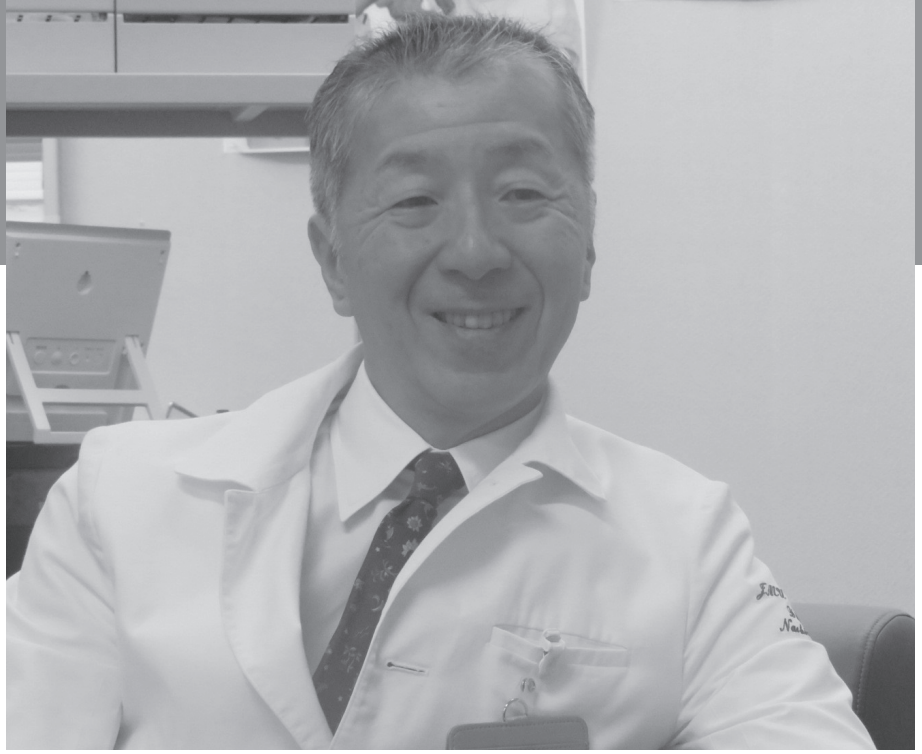
INTERVIEW

自治医科大学附属病院 病院長
外科学講座消化器・一般外科部門 教授
佐田尚宏先生



“親元”の病院として，卒業生を支えていきたい.

聞き手：山田隆司　地域医療研究所長

栃木県200万人の高度急性期・急性期医療を支える

山田隆司(聞き手)　今日は自治医科大学附属病院に佐田尚宏病院長をお訪ねしました.

私もそう頻繁に大学病院を訪れるわけではありませんが，訪れるたびに新しい建物が建っているという感じで，自分が卒業した1980年当時に比べると，中央の建物が残っているだけですっかり様変わりをしています．今日はその大学病院の現状も少し紹介していただければと思います.

まずは先生のご経歴を簡単にお話しいただけますか.

佐田尚宏　私は1984年に東京大学医学部を卒業しまして，当時はストレート研修の時代だったので，そのまま東大第一外科に入局しました．１年間，外科と麻酔科を半年ずつ研修して，その後３年間，外勤病院で外科修業をし，５年目に大学に戻って第一外科の胆膵グループに所属しました．スペシャリティとして膵臓外科医を目指していましたので，膵臓手術やERCP(内視鏡的逆行性胆管膵管造影)をやりたいということがありました.

その後５年ほど研究生活を送り，それからドイツのデュッセルドルフに２年間留学して，1996年に120床くらいの小規模な総合病院で外科部長として赴任し，３年７ヵ月，いわゆる外科のジェネラリストとして仕事をしました．まだ若かった時ですが外科のディシジョンメイキングを全て自分でするという状況で，そこでの経験は大きかったと思っています．その後2000年４月に自治医大の消化器外科に着任し

て，現在に至ります．

山田　膵臓癌は診断から治療，その後の成績まで臨床的にはかなり難しい分野ですね．

佐田　そうですね．以前は，膵癌はほとんど治らないと考えられていましたが，2000年以降，かなり予後も改善してきました．私自身，膵癌の予後改善と膵頭十二指腸切除の手術成績改善をライフワークとしてきました．

現在全国統計を見ると膵頭十二指腸切除術の死亡率は２％くらいありますが，当院では2001年以降死亡率ゼロです．以前は10％を切っていた切除例の５年生存率も全国統計では25％くらいまで改善していますが，当院の2008年以降のデータでは44％になっています．これには早い時期に膵癌を見つけて手術ができているということと，化学療法の進歩がかなり大きいと思っています．

山田　自治医大病院の治療成績のお話が出ましたが，今の自治医大の一番の強み，大学病院としての誇れる部分というのはどんなところですか．

佐田　栃木県の1,000床以上の病院は自治医大附属病院と獨協医科大学病院のみで，両者で栃木県200万人の高度急性期・急性期医療を支えているのですね．自治医大附属病院は，病床数1,132床，診療科は46，新入院の患者数は年間約２万4,000人です．力を入れているのは主に５疾病５事業の中で，がん，脳卒中，心筋梗塞，救急医療です．５疾病のうち糖尿病，精神疾患は，やや慢性的な部分がありますが．私は消化器外科医なので，やはりがん診療をしっかりとやって成績を向上させる．そこにまず力を入れています．残りの２つ，心筋梗塞，脳卒中は救急疾患になるので，診療体制をしっかりしていきたいと思っています．

また，今年度は４つ重点項目を挙げています．１つは多発外傷を含めた高度な救急医療，２つ目は脳卒中センター，３つ目は外来化学療法です．がん診療はこれから増えていきますし，抗癌剤治療は徐々に外来にシフトしているのですね．そのボリュームをできるだけ増やすために，２年後には今の外来化学療法センターを倍ぐらいにする計画を立てています．そして最後の１つは急性期のリハビリです．４年ほど前から，診療報酬上でもリハビリの重要性が言われていますので，今年は理学療法士を６人増員して力を入れていきたいと考えています．

山田　急性期のリハビリが重要視されるようになったのには高齢者が多くなってきたという背景もあるのでしょうか．

佐田　そうですね．早く回復していただくには，もう手術の翌日から動いてもらったほうがいいということが分かってきたからということもあると思います．

連携病院との協力が重要

山田　自治医大病院には栃木県全域から患者さんが来るという状況ですか．

佐田　そうですね，栃木県内全域からいらっしゃいますし，県外からも受診されます．県外で多いのは茨城県の西部ですね．来院数の15％ぐらいは茨城県からいらっしゃっています．また，最近，徐々に増えつつあるのが埼玉の利根医療圏です．利根医療圏にはあまり大きな病院がない